



岩田老人日記



川崎ゆきお

見回り人が岩田老人宅を訪ねる。

「最近どうですか。お変わりありませんか」

「あんた、別の人だな。変わりがあるのはそっちだね」

「そうでしたか。初めまして、よろしくです」

「しかし、これはセールじゃないだろうねえ」

見回り人は写真入りのカードを見せる。

「そんなもの簡単に作れるさ」

「いえいえ」

「いえいえじゃないよ。突っ込んで欲しいなあ」

「じゃ、どうして簡単に作れると」

「パソコンとプリンターがあれば、作れるさ」

「ああ、なるほど」

「そうじゃなく、もっと突っ込まないと。ネタを引き出しなさいよ」

「と、いますと？」

「パソコンを買ってねえ。通販で安かった。プリンターも付いてきた。まあ、それはあまり使わないがね。それと、ネットに繋がったんだ」

「ああ、パソコンをおやりで」

「おやりおやり、大おやりだよ」

「そうなんですか」

「だから、それ以上突っ込めないのかね。せっかく話題を提供しているのに」

「ああ、そうですねえ」

「もういいから、帰っていいよ。用件は終わったんだろ。生存確認だろ。ちゃんと生きてるよ」

「はい、また、お邪魔します」

見回り人は帰った。

岩田老人がパソコンの前に戻ると、死んでいた。全滅だ。

ゲームでボス戦をやっていた。仲間と一緒に退治に出たのだ。これは二時間以上かかる。岩田老人が抜けたので、チームは弱くなり、ヒーラー役の岩田が欠けたことで、全滅していた。悪いことをしたと、岩田は悔やんだ。

せっかく出来た仲間達の信頼を裏切ったことになる。一言落ちますと言うべきだったのだ。

「まあ、それはいい」

岩田は、もう二度とそのゲーム内で、ウロウロ出来ないと思い、別のサーバーで新キャラを作り、そこでまた始めることにした。

「岩田さーん」

また、玄関で声がする。聞き覚えのある声だ。

ゲームを終了させ、表を見に行く。

「さっき変な人、来ませんでした」

顔を出したのは、いつもの見回り人だった。

「やっぱり、あの人、偽物か」

「そうです。泥棒の下見ですよ。気をつけてください」

「どうりで要領の悪い人だと思ったよ」

「それで、お変わりありませんか」

「だから、その、下見の人が来たよ」

「はいはい。だから、知らない人は偽物です。新しい人と交代するときは、紹介しますから。だから、知らない顔の人は、偽物ですからね」

「ああ、分かった」

「他に変わったことありますか」

「パソコンを買って、ネットに繋げた」

「それはいいですねえ」

「ああ、ゲームをして楽しんでるよ」

「変なサイトへ行っちゃ駄目ですよ。詐欺に遭いますからね」

「はいはい」

了